平成21年9月30日

五　小　の　風　景 No. 6

五日市小学校長　　国政　直文

子どもが育つ魔法の言葉

前期も残りわずかとなりました。今年度の折り返し時期にもなります。前期までの成果と課題をあゆみでしっかりと確認し，後期につなげていってほしいと思います。

さて，今回の表題は，ドロシー・ロー・ノルトさんが著された「子どもが育つ魔法の言葉」という本の題名です。

この本を読まれた方も多いと思いますが，この本の中にのっている「子は親の鏡」という詩は，子育てをしていく上でとても参考になります。そこで，今回はその詩（全部で19の言葉からなっています）の一部と一つの言葉の解説を紹介いたします。

残りの言葉については，次回号で紹介します。

○　けなされて育つと，子どもは，人をけなすようになる
○　とげとげした家庭で育つと，子どもは，乱暴になる
○　不安な気持ちで育てると，子どもも不安になる
○　「かわいそうな子だ」と言って育てると，子どもは，みじめな気持ちになる
○　子どもを馬鹿にすると，引っ込みじあんな子になる
○　親が他人を羨んでばかりいると，子どもも他人を羨むようになる
○　叱り付けてばかりいると，子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう
○　励ましてあげれば，子どもは，自信を持つようになる
○　広い心で接すれば，キレる子にはならない
○　誉めてあげれば，子どもは，明るい子に育つ

これらの言葉の中で，今回は，次の言葉についての解説を紹介しましょう。

○「かわいそうな子だ」と言って育てると，子どもは，みじめな気持ちになる

・やる気のある子，努力を惜しまない子になるように育てるにはどうしたらいい のでしょうか。それには，まず，親自身が手本になることです。手本といっても，完璧な手本になる必要はありません。逆境に陥ったとき，挫けずに立ち向かうことができれば十分なのです。それから，子どもを信じることが大切です。

・みじめな気持ちになってしまったら，もうそれ以上いやなことを考えないように気持ちを切り替えることです。たとえば，自転車に乗って汗をかく，外を速足で歩くなど，何か他のことを始めるのです。どこか素敵なところを旅している自分の姿を思い浮かべるなどのイメージ療法を試してみるのもいいかもしれません。

・子どもは，親にかまってもらいたくて，同情を引こうとすることがあります。また，子どもは，「自分にはできない」と言って，親の同情を引こうとすることもあります。大事なのは，子どもが「もう一度やってみよう」と思えるように，チャンスを与えることです。親の自分が苦手なことは，子どもも苦手なんだと思い込まないように気をつけてください。親の役目は，子どもを励まし，導きながら，埋もれている能力を引き出すことなのです。

・いやなことや悲し いことがあったとき，いつまでも自己憐憫にひたっていてもしかたがありません。どうしたら前向きになれるか，そんな力を持つことができるように親は子どもを導いてゆきたいものです。子どもを信じ，励ますこと は，子どもに同情することよりも，ずっと大切なことです。